作家の運命を変えた一冊の本

塩澤実信

流動出版

作家の運命を変えた一冊の本

流動出版

塩澤実信

《著者略歴》

塩澤　実信（しおざわ　みのぶ）
1930年 長野県生まれ
双葉社取締役・編集局長をへて現在フリー
著 書 『出版社の運命を決めた一冊の本』（1980年　流動出版）
『創刊号に賭けた十人の編集者』（1981年　流動出版）ほか

現住所　東京都東村山市美住町1—11—30

作家の運命を変えた一冊の本　　定価1500円

1981年11月25日　初版発行

著 者 塩澤　実信
発行者 小山　敦彦
発行所 流動出版株式会社
東京都港区愛宕1—2—2（第9森ビル）
電話／03-433-7461（代）　振替　東京107534　〒105
印刷／株式会社 光邦　　製本／大口製本印刷株式会社

〈検印省略〉　　0095-0040-8942

落丁・乱丁の場合はお取替えいたします
© Minobu Shiozawa　1981 Printed in Japan

作家の運命を変えた一冊の本――目次

第一章　阿佐田哲也と『麻雀放浪記』　5
第二章　川上宗薫と『流行作家』　31
第三章　梶山季之と『黒の試走車』　57
第四章　山田風太郎と『くノ一忍法帖』　83
第五章　宇能鴻一郎と『遊びざかり』　109
第六章　大藪春彦と『野獣死すべし』　135

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第七章　森村誠一と『人間の証明』　159
第八章　笹沢左保と『木枯し紋次郎』　183
第九章　松本清張と『昭和史発掘』　209
第十章　梶原一騎と『巨人の星』　237
あとがき　266

装幀＝熊谷　博人＝

第一章　阿佐田哲也と『麻雀放浪記』

三十年生きて、小説らしいものが一本書けたのなら、もう三十年、又生きて、それでもう一本書いてやろう。

――色川武大

覆面作家の登場

眼と鼻と口以外を覆面でおおったプロレスラーの登場は、アルファ人間を解き明かそうという気持ちを観客に抱かせる。そのミステリアスな雰囲気は、見る者の好奇心を増幅させて、勝負をさらに面白いものにする。

小説にしても同じことだ。作者が覆面作家の正体不明であり、作品が実在作家の片鱗を示さぬ内容と筆致であった場合、読む者の興味をいやがうえにもかきたてる。

阿佐田哲也が、無類の面白さにみちた麻雀小説を舞台に、忽然と登場したときの雰囲気は〝覆面作家〟にまことにぴったりした登場ぶりだった。

昭和四十四年の春先の頃だった。

その頃、銀座のレストラン「白汀」で、「週刊大衆」主催の田辺茂一と梶山季之の対談が行われたことがあった。編集長と担当記者も末席に連なっていたが、梶山は席に着くなり編集長に向かい、

「阿佐田哲也って、何者ですか……」

と、度の強い眼鏡の奥の柔和な眼に、あるおそれの影を浮べて訊いてきたのである。

阿佐田哲也とは、その頃「週刊大衆」誌上に連載中の『麻雀放浪記』の作者名だった。底知れない魅力を秘めた麻雀ゲームは、いったんはじめると一昼夜でも二昼夜でも人を遊びの虜にしてしまう。宵から打ちはじめて朝となり、徹夜を通すことはめずらしいことではない。

その麻雀ゲームの実態を、「アサダテツヤ」というフザケたペンネームに結びつけて、とてつもなく面白いギャンブル小説を書きつづけている謎の人物だった。阿佐田哲也の『麻雀放浪記』は、そのフザケた名前にそぐわない、ギャンブル博打に身をもち崩し、修羅場を生き抜いた者にのみ描けるアウトローの世界が、実にヴィヴィッドに描かれていた。

その筆力はたしかであった。登場人物の私こと〝坊や哲〟だの〝ドサ健〟〝出目徳〟〝女衒の達〟などの人間像が躍動し、なまなかの筆者では描けない端倪すべからざる実力を感じさせた。

月刊誌、週刊誌上に、破天荒なポルノ小説を量産し、〝助平人間〟を自称して八面六臂の活躍をしている〝梶サン〟にも、その人気をおびやかす新人の登場——と考えられたにちがいない。

プロ作家の梶山季之をおそれさせた理由はいまひとつあった。筆力と好奇の世界をのぞかせる新人作家の登場は、昨今、そうめずらしいことではなかった。大衆小説に不可欠なストーリイの展開と面白さを描ける新人も少なくはなかった。しかし『麻雀放浪記』には、日本の大衆小説にかつて、こころみられたことのない新趣向が用いられていたのである。

それは、アウトローたちが、人智をつくしてくりひろげる麻雀戦の様相が、配図によって読みとれる仕組みになっていたことである。つまり、麻雀牌自体が主人公たちと一緒に、ストーリイの展開にかかわっていることだった。この筋立ては麻雀打ちにはこたえられない面白さだった。

その一方で『麻雀放浪記』は、麻雀が皆目わからない読者をも、耽読させる魅力をもっていた。阿佐田哲也が登場する以前のギャンブル小説のほとんどが、ゲームのテクニックに溺れて、人間がからきし描けていなかったのに較べて、この小説は麻雀ゲームを背景にして、普通の小説に近い仕立て…

…人間を描いていたからだった。

このことは、『麻雀放浪記』から、アトランダムに、一部を引用してみると、より明らかになろう。

「恐ろしい形をしたいくつもの黒雲が、すごい早さで空を横切っていた。低気圧が来ているらしい。

私はその頃、中学校の制服を着たまま、毎日上野へ来て、浮浪者と一緒にぼんやり坐りこんでいた。家には商事会社（つまり闇屋の会社だ）に勤務していることになっていた。私の親もご多分に洩れず敗戦で失職し、おまけにインフレで、学校どころではなかった。

しかし、私はまだ就職していなかった。まだ見つからぬうちに、家の中の暗い空気に居たたまれず、出勤と称して、毎日家を出ていたのだ。（中略）

もう、夕方であった。

私はいつもの通り、国電で帰宅するために、西郷さんの銅像の下を離れて公園の道を歩き出した。細道のきわに痩せこけた中年の男が、一人立っていた。おい兄さん、と男は私を呼んだ。『ちょっと話があるんだ。此方へこいよ』

男の片腕が肩のつけ根から無かった。……」

（『麻雀放浪記』青春編）

主人公の私こと〝坊や哲〟が登場する件りだが、その達意な文章はギャンブルを離れても、読者を引っぱっていく力をもっていた。登場人物の一人一人が生きていて、その動きは麻雀という背景を抜きにしても読むに耐える魅力にみちていた。

梶山季之が声をひそめて、その正体を訊く理由は、麻雀を知らないその編集長にも理解できた。

「色川さんですよ。色川武大……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

梶山の表情は、謎の人物のフルネームを言い終わらぬうちに和んだ。ピース罐から抜きとった一本の煙草を軽く口にくわえると、

「ああ、色川さんね。色川さんだったらわかる……安心しましたよ」

梶山はそこで言葉を切り、緊張感から解放されたように一息、煙を吐き、間をおいて言った。

「もし素人に、あんな巧い小説を書かれたんでは、僕らはメシの食いあげですよ。色川さんだったら、当然、お書けになる小説でしょう」

その奔放な小説とウラハラに、実生活では長上の義をわきまえ、きわめて礼儀の正しかった梶山季之は、第六回中央公論新人賞作家・色川武大に深い畏敬の念をこめて、そう言ったのだった。

中公新人賞受賞後の沈黙

色川武大が『黒い布』によって、第六回中央公論の新人賞を得たのは、昭和三十六年九月のことであった。第一回の受賞者に、深沢七郎の『楢山節考』を選ぶこの新人賞は、特異な資質をもつ新人を発掘する舞台として、文壇の注目を浴びていた。

色川武大の『黒い布』は、丹羽文雄の『厭がらせの年齢』の父親版といわれ、選者の三島由紀夫らの高い評価を得ていた。色川の父親は、予備役の海軍少将であった。彼がものごころつく頃には、すでに恩給で生活する身であったが、この父は海軍提督の姿勢を戦後もかたくなに守って、生きつづけてきた。色川の幼い頃、殴るときに馬鞭を使うような根っからの軍人だった。

偽善にみちた父親に反撥するように、色川武大は子供の頃から、手におえない変わった少年だった。

「小学校低学年の頃は学校の便所が使えなかった。我慢に我慢を重ねて、家まで走り帰り、玄関にぶち撒けてしまったことが何度もある。朝の洗顔ができない。風呂に入れない。床屋に行けない。衣服をかえられない。合唱ができない。一人ではよけい唄えない。唄の情緒というものは万人共通の顔をしているから。喧嘩ができない。皆がしゃべるときにはしゃべれない。誰もやらないこと以外はすべて抵抗がある。そのかわり、列を離れる範疇に属することならいかなることがあってもおどろかない。

（人並みでないくせに）人並みであろうとするはずかしさを堪え忍ぶくらいなら、孤立、孤独の方がはるかに楽なのである。嘲笑には強い。のみならずそれを逆手にとって生きられるならその方が安定感がある」

（『怪しい来客簿』）

幼い時代にグレ、中学無期停学、敗戦とともに博打打ちの世界に沈淪久しかった〝特異人間〟を知る者は、色川武大の中公新人賞受賞を信じられぬアクシデントと、訝かった。

「君が賞をもらうようじゃ世も末だね」

と、親しい者の一人が、面と向かって色川に言った。嘲笑には強い色川は、常識的人間だったら激怒するような言葉を浴びせかけられても、「ほぼ同感」の思いで受けとめていたという。

それは、ずっと本気で文学に精進している苦節ン十年の刻苦勉励型に較べたら「自分などは冷やかし半分の無頼漢」に、世間の人は見たのではないか、という認識からだった。——もっとも、韜晦を

得意とする気質を、幼い頃から人一倍に増幅させ、いまや習い性となった感の深い色川の言葉を、額面通りに受けとることには異論もある。が、少なくとも当時は、ドロップ・アウト人間の受賞を、世間は「世も末」と受けとめたことは事実だった。この気持ちは、色川武大の〝表面〟を知る人ほど強かった。自らも好んで、アウトロー、落ちこぼれ、無頼人間伝説をふりまいたきらいはある。

しかし、その作品『黒い布』だけを読んだ人々は、色川武大を「すぐれた資質をもった新人作家の登場……」と、深い畏敬の念をこめて、熱い眼差しで見つめていた。新人賞の選にかかわった人々も、この新人作家が、原稿のマス目いっぱいを埋める力のこもった文字を書き記して、遅筆ではあるが、確実な作品を世に問うていくものと嘱望した。

色川武大は、だが、世間の熱い期待感を外に、中央公論の小説特集に時代小説を一本発表。同人誌の「犀」や「早稲田文学」などに地味な小説を二、三書いたのみで、色川武大の名では、ほとんど作品を発表しなかった。

色川は、沈黙の理由を、十余年後のエッセイで、次のように説明している。

「三十年生きて、小説らしいものが一本書けたのなら、もう三十年、又生きて、それでもう一本書いてやろう。教養ある玄人作家に対抗する作品を書くには、彼等にできない長い時間をかけるより手はない。もし、小説を書く気ならば、三十年とはいわないまでも、じれったくなるような長い時間を、沈黙して生きるよりほかはない」

いま一つは、「私がたった一度書いた受賞の小説が、本人もびっくりするほど讃辞を呈されて……文章に関することで無責任な所業をしないことが、賞をくれた人々に対する礼儀」と思った故でもあ

った。

色川武大の本名で書かない理由はなんであれ、栄えある中公新人賞を受賞後、突如、筆を絶って喰えるはずはなかった。自宅は牛込北町にあったから、宿には困らなかったが……。もっとも、十代後半から、比較的ふところに余裕がある場合はドヤ街に泊り、ない場合は、「道ばたや他人の家の芝生や鉄橋の橋げたや、いろんなところに寝ていた……その方が楽だったから」と記す色川は、時と場合により何処ででも寝られる修練はできていた。しかし金だけは、何らかの方法で稼がねばならない。色川は、筆を絶った代償として、当面の喰いぶちを、競輪と麻雀に頼ったのだった。

敗戦直後の数年間を博打の世界で喰いつなぎ、昭和二十七年以来、足を洗って、小出版社の編集者をしたり、匿名で大衆小説を書いてきたが、十年にして、また元の博打打ちに戻ったわけだった。いや、正確に言えば、僅かな勤めの時代でも、彼は本質的には博打打ちだった。

「……一度、ばくちで稼ぐ味をおぼえてしまったので、似たような、なお面倒なことをする気はない。本当は下品でない生き方をしたかったけれど、職歴学歴なしの私を雇ってくれるところはどこも五十歩百歩のはずだった。

当時私は左のような戒律を自分に課していた。

一カ所に淀まないこと。

あせって一足飛びに変化しようとしないこと。

他人とちがうバランスのとりかたをすること。

ばくちで覚った教訓を応用しているつもりだったが……」

（『怪しい来客簿』）

色川のアウトロー生活への回帰は、とりもなおさず、勝手知った世界へ戻ったことでもあった。その彼の気のおけない溜り場となったところは、牛込北町の自宅から徒歩で行ける距離の双葉社だった。市ケ谷の外堀通りに面したその社は、当時、同工異曲の大衆娯楽の読み物雑誌を十数誌出している雑誌社だった。

色川武大が、井上志摩夫のペンネームで発表する剣豪小説の上得意であったし、家族的雰囲気で、遊び好きな編集者が多かった。

その友人のひとりの「宮本祐二郎という編集者と知りあったのが、私には画期的なことだった。彼が競輪の天才だったからである」（『朝だ徹夜で、日が暮れて』）と色川は後年記すが、『小説　阿佐田哲也』によると、かなり変型（デフォルメ）された形で、その件りは次のように書かれている。

「虫喰仙次は、職業は編集者だったが、奴とのつながりは競輪と麻雀だった。……奴は虫喰に、競輪の髄を教わり、麻雀の奥を教えた。（中略）虫喰は奴より二つ年上だったが、苦労して育ち、下積みの仕事を転々としながら、しかし相当に頑強だったらしく、何かに屈したような気配は身につけていなかった。編集者になる直前の職は、魚河岸の運転手である。（中略）当時、魚河岸を舞台にしてヒットした大衆小説の主人公のモデルと囁かれ、それが縁で雑誌社に転入した。そうして半年もすると、素人のはずの虫喰が、その社の五、六十人居た社員たちを魅了し、実質的なボスになった。上役も先輩も糞もない。当時、彼に追随しなかったのは創業主の養子だけだったと思う。

虫喰は昼近くに社に現われ、出勤簿に判を押す。昼休みには同僚を引具して近くの喫茶店に行き、仕事の打ち合せをし、身上相談に乗り、呼んでおいた作家、画家に会い、（彼の雑誌は大家や流行作

家は使わなかった）一時すぎタクシーをつかまえて競輪場に向かう。日曜日だけはどこですごすかわからないが、週日の午後は必ず競輪場だった」

（『小説　阿佐田哲也』）

虫喰仙次イコール実在人物、にはならないが、この二人がインフォーマルな関係で、より深く結ばれた友人であることは否めないところだった。彼は、井上志摩夫の小説を高く評価し、自由気ままに発表する舞台を提供していた。その舞台とは「大衆小説」という文字通りの大衆読み物雑誌だった。『小説　阿佐田哲也』では、彼の恣意で「大家や流行作家は使わなかった……」となっているが、安い原稿料と手軽な雑誌づくりでは、大家や流行作家は使いたくとも使えなかったのだ。

色川武大と双葉社の編集者たちとの関係から、彼が匿名にしろ、ペンネームにしろ、沈黙を破って、問題のエンターテインメントの小説を発表する舞台は、双葉社から発行されているいずれかの雑誌というムードが、二重にも三重にも、醸成されていたのだった。

雀豪作家、誕生の土壌

色川が双葉社のメイン雑誌「週刊大衆」に、阿佐田哲也の名で麻雀小説を書きはじめたのは、中央公論新人賞を受賞して六年後であった。

「週刊大衆」は、出版社系の週刊誌としては「週刊新潮」「週刊女性」につぐ、早い時期の昭和三十三年四月に創刊されていた。偶然にも、赤線の灯が消される同時期である。「アサヒ芸能」によく似た官能的な編集方針をとった軟派系週刊誌だった。「週刊新潮」が、文芸出版社の伝統を生かした文

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com